

耕心塾

漢字かな交じり書 通信講座

「好きな言葉を書く」

協

賛

心
線
組

耕心塾

漢字かな交じり書 通信講座

目次

◆書関連・掲載記事から		
1. 「山頭火を書く」	墨 2006年5・6号 (株) 芸術新聞社	1 { 4
2. 「短歌を書く」	墨 2013年7・8号 (株) 芸術新聞社	5 { 14
3. 「カタカナを生かした詩文書」	書画の娛しみ 2010年6・7号 (株) 可成屋	15 { 16
◆解説・案内・その他		
4. 書家にとって大事なこと		
墨 2013年7・8号 (株) 芸術新聞社		17 { 18
5. 谷川俊太郎+添田耕心・その他		
墨 2013年7・8号 (株) 芸術新聞社		19 { 20
6. 「21世紀の『書』を語ろう」		
墨 2001年7・8号 (株) 芸術新聞社		21
7. 「耕心塾」受講案内		22 { 23

「山頭火を書く」

心に響く山頭火の句を作品にしてみましよう。まずは身近にある半紙をつかって、基本の形式からスタート。句の雰囲気を生かすには、行間や余白の取り方も大切です。ここでは初心者にも取り組みやすい句を例にあげ、文字のバランスや行の区切り、墨の潤渾などを指導していただきます。

■縦形式に三行で書こう

十五字から二十字が目安

半紙の縦と横の比率から考えて、定型句の字数の場合三行書きが妥当かと思われます。ただし山頭火の場合、句によって字数が異なるので、漢字がいくつ使われるかにもよりますが、十五字から二十字前後が適するように思います。

その際、作品として中央の行が見せ場となるので、二行目に少なくとも漢字が一字ないし二字あった方がよいと思います。実際に三行書きにふさわしいと思われる山頭火の句をあげて、いくつか行分けの例を示します。

【三行書きにふさわしいと思われる句】

あの雲がおとした雨にぬれてゐる

ほんによかつた夕立の水音がそこそこ

酔ざめの悔に似たものが星空の下

選句について

書作にあたって、やはり自分の好きな句を書きたいと思います。しかしここで問題が生じます。それは作品として、まとめやすいものと誰が書いたとしてもまとめにくいものがあるということです。基本的に漢字をかなに、かなを漢字に勝手に変換することはできません。作品効果を上げるためにも、漢字とかなのバランスを考え、選句したいものです。

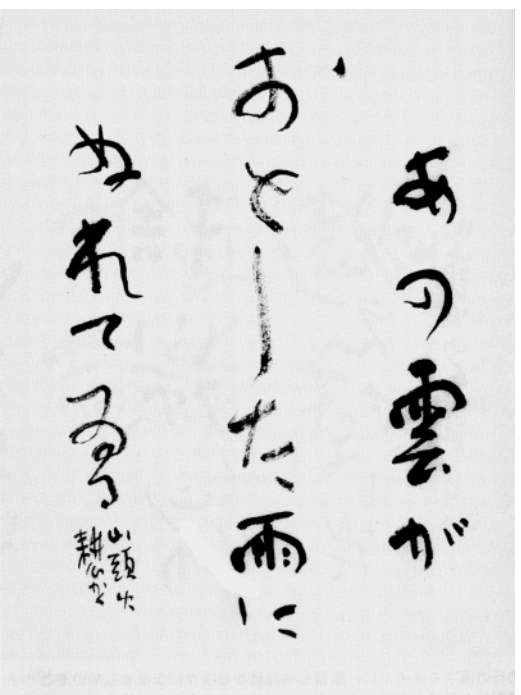
次にあげる句は、中央部にひらがなが集中してしまい、作品にするには困難をきわめそうです。避けたい方があると思われます

【三行書きにまとめにくい句】

枝をさしのべてゐる冬木

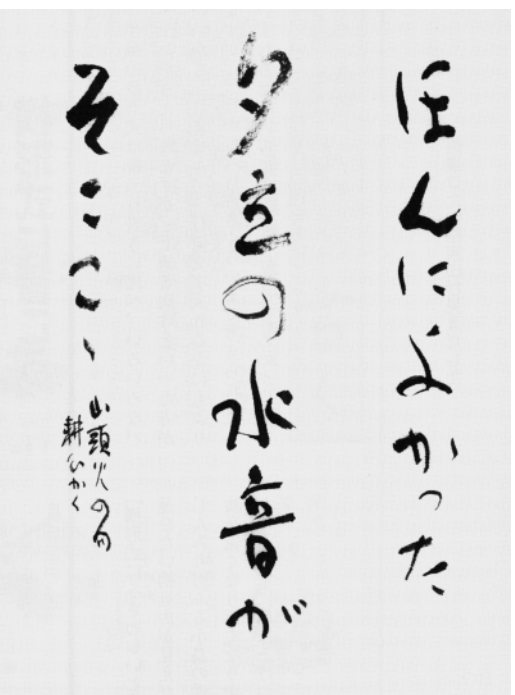
水音のたえずしていばらの実

草を咲かせてそしてふちよをあそばせて



あの雲がおとした雨にぬれてゐる

中央の行に「雨」一つが漢字。ここでの墨つぎをはっきりさせるために「おとした」を渴筆で。「ぬれてゐる」は「あの雲が」より墨量を控えめに全体をまとめる。



ほんによかつた夕立の水音がそこそこ

一・三行目がすべてかなで二行目に漢字四文字。この漢字を潤渾で書き分けてまわりの行とのバランスをとるとよい。三行目「こ」の三連続は大小、潤渾で変化を。

■横形式に書く

半紙の横形式は縦三行書きに比べ、いろいろなパターンが考えられますが、上級者向けといった方がいいかもしれません。一行何文字入れるかにもよりますが、三行から六行書きくらいまで考えられます。いずれも意味内容によって行分けされるのが自然です。いくつか行分けの例をあげてみましょう。

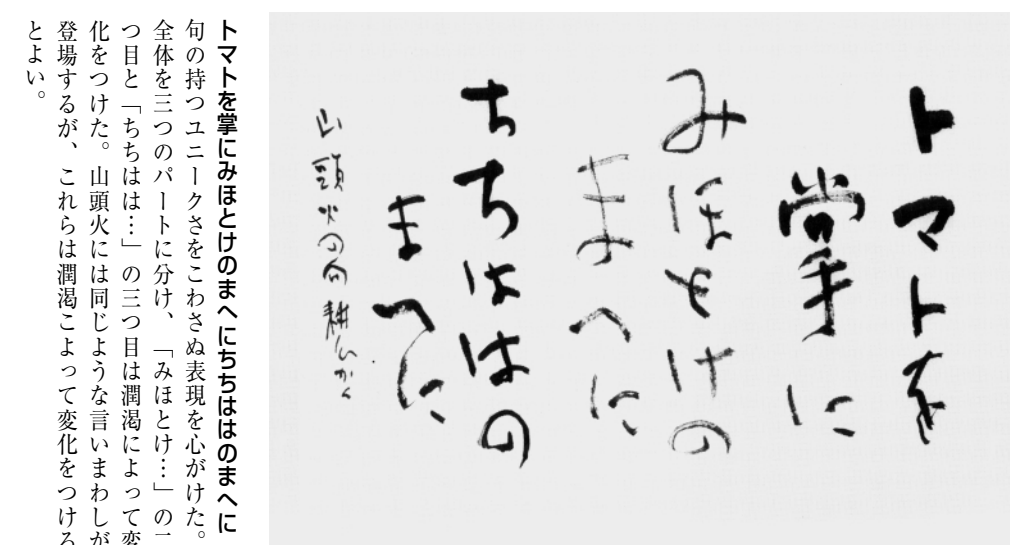
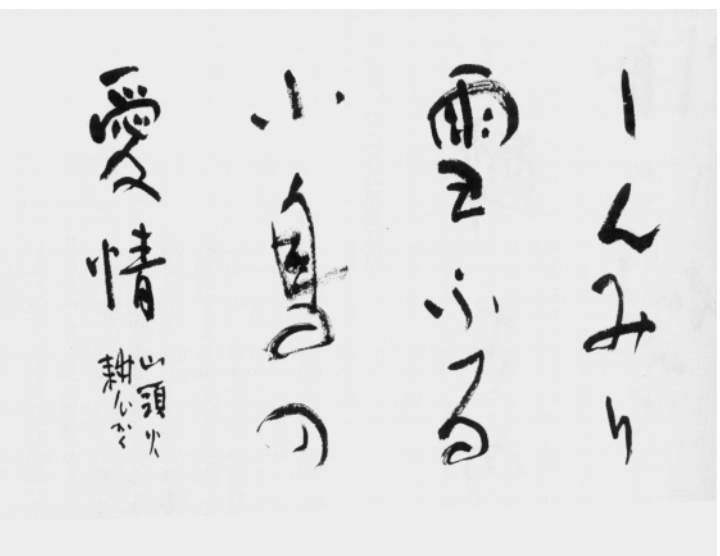
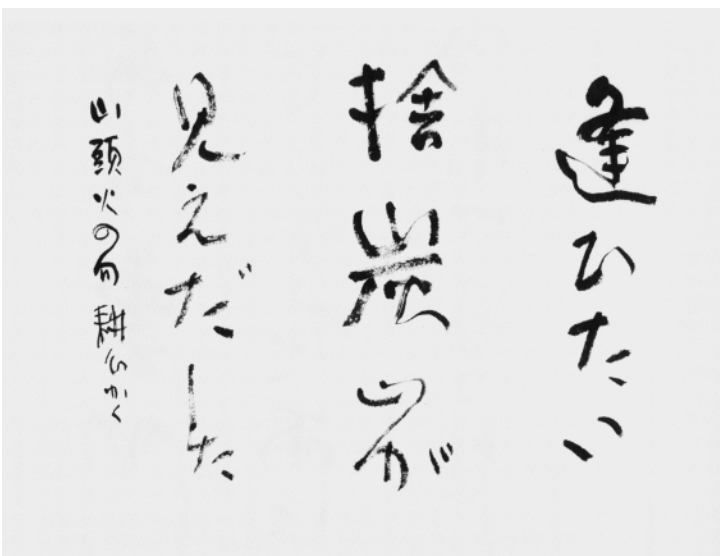
【横形式にふさわしいと思われる句】

逢ひたい捨炭山が見えだした (三行)

しんみり雪ふる小鳥の愛情 (四行)

波音遠くなり近くなり余命いくばくぞ (五行)

トマトを掌にみほとけのまへにちちははのまへに (六行)



トマトを掌にみほとけのまへにちちははのまへに句の持つユニークさをこわさぬ表現を心がけた。全体を三つのパートに分け、「みほとけ：」の二つ目と「ちちはは：」の三つ目は潤渇によって変化をつけた。山頭火には同じような言いまわしが登場するが、これらは潤渇によって変化をつける点とよい。

逢ひたい捨炭山が見えだした
中央の行の漢字をメインに、墨量も一行目から徐々に少なくしていくことで時間的な経緯を表現しようとした。落款の書出しで墨をつけ、全体を引き締める感じで。

しんみり雪ふる小鳥の愛情
これも漢字とかなのバランスがよいように思う。「小鳥の」を今少し渴筆にし「愛情」の潤筆を引き立たせてもよかったと思う。行間のあけ方が微妙に難しいが、これは経験によって身につけるしかないと思う。

■縦二分の一に書く

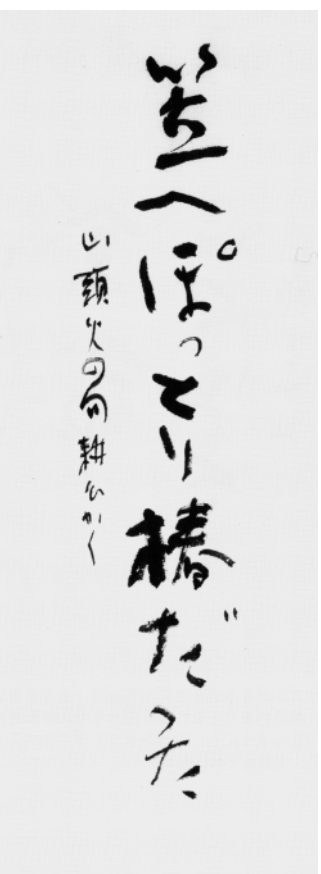
山頭火の句には一行書きに適す字数のものと、意味の上から二行書きに適するものがあるように思う。

一行書きの場合、一気に書き上げる感じではなく、潤渇、メリハリをつけ、作品に深みを出すことが大切です。落款の入れ方にもよりますが、今回の場合スタートを中央より幾分右寄りにするとよいでしょう。

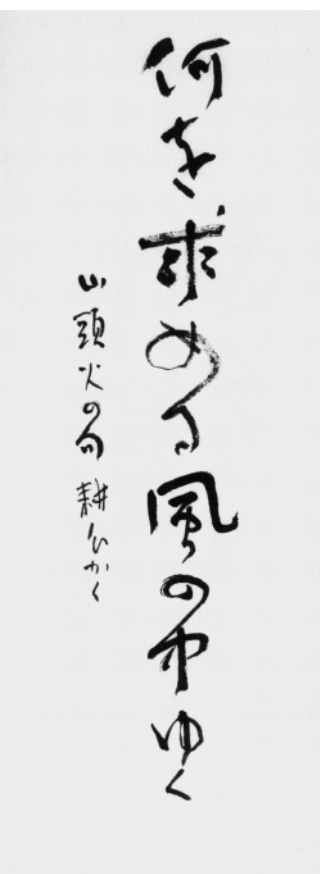


【一行書き行書きにふさわしいと思われる句】
分け入れば水音

笠へぼつとり椿だつた
何を求める風の中ゆく



笠へぼつとり椿だつた
あえて潤渇を強調せず、自然な流れを大切に。「ぼ」「だ」の半濁点や濁点も一行書きにおいては一つの見せ場になる。



何を求める風の中ゆく
句の持つ厳しさを意識したためか「求」と「中」の縦画が全体を引き締める効果を上げていると思う。

■方形に書く

半紙の下部を六センチ強おとすと、ほぼ色紙大の方形ができます。

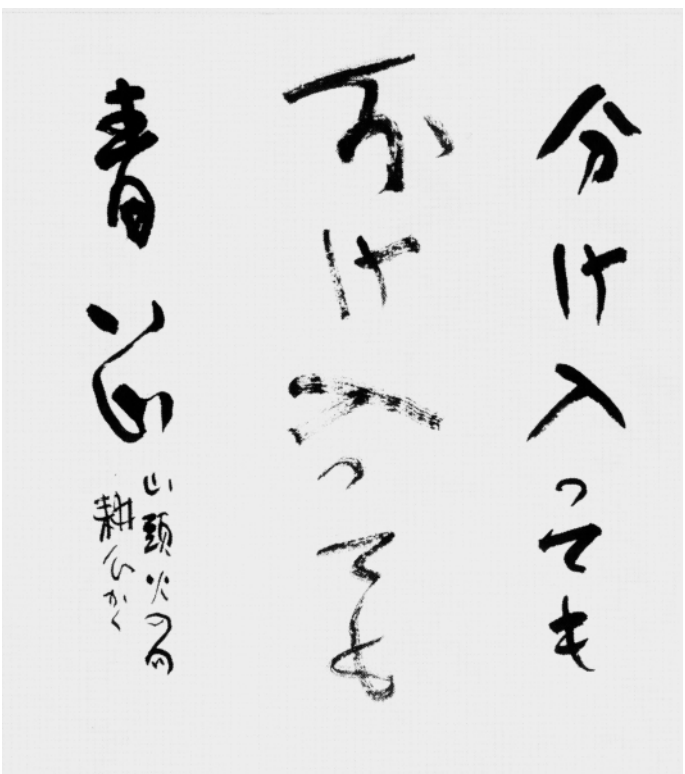
この方形に山頭火の句を書いてみましょう。行数としては半紙同様三行書き。ただ半紙縦と違い、字数が一行三字から六字くらいと限定されるでしょう。いくつか行分けの例をあげてみましょう。

【方形三行書きにふさわしいと思われる句】

分け入つても分け入つても青い山

花いばらここの土とならうよ

あるがまま雑草として芽をふく



分け入つても分け入つても青い山

一行目と二行目が全く同じ。これを見せ場にしたもの。もちろん潤濁による変化と中央の行を大きくすることで変化をつけた。中央部の「分」は草書を使ったが、このようにくり返しの表現では草書でも読んでもらえると思う、私は使うことが多い。最終行は墨を盛り上げるようにじっくり書いた。

「短歌を書く」

入門講座

◆ 題材選びから草稿作りまで

一、魅力的な題材を選ぶ

はじめに、岡本かの子の歌を素材に作品を書くことにしましょう。今回は有名な「桜花の歌」を選びました。この歌の魅力はなんといっても、一気に咲く桜のエネルギートと自分の生命とをかけ合わせ、自分もそうありたいと思う共感をストレートに表しているところです。かの子は奇才と呼ばれた歌人で、女性の観点で書いた耽美的な作品を多く遺しています。この歌は男性も理解しやすい心情が歌われており、読むと前向きになれたり元氣が出ます。まずは歌の内容に惹かれて、ぜひ書いてみたいと思います。

二、字面を見る

もちろん、歌を選ぶ時は字面（じづら）のことも頭をよぎります。ここでは「生命」という字が歌の真ん中にきていて象徴的です。それから「いのち」と「生命」の二つが、かなと漢字で表記されています。かの子自身が使い分けていることに、書き手として魅力を感じました。もし両方ともひらがなだったり、両方漢字だったら果たしてこの歌を選んだらどうかと思わなくもありません。

また、作品として展開する際、「読める」ということは非常に重要で、短歌の意味上の切れなども本来は大事にしたいと思っています。ただし、やはり書は「視覚芸術」ですから、短歌としての文学性という“足かせ”を取り払ったところで書きたい。造形として見る眼のほうを優先するべきとも思うのです。料理と一緒に、ぱっと見た時に「おっ」と言わせることも必要だからです。

三、草稿を書く

この歌の場合、全部で二十八文字です。内訳は漢字が六字、ひらがなが二十二文字あります。ひらがなが四字以上続く箇所もあり、素材として決して書きやすいとは言えません。その意味では、限られた漢字をできるだけ生かし、漢字がもつ構築性とパワーを引き出しながら、作品をつくってみようと考えました。

【題材】

さくら花いのち一ばいに咲くからに
生命をかけてわが眺めたり



ほうですが、今回はいくつかの形式で草稿を作ってみました。実際に草稿を書いてみると、この字の並びは難しいと感じたり、この形式は無理があるということも分かってきました。

四、形式を決める

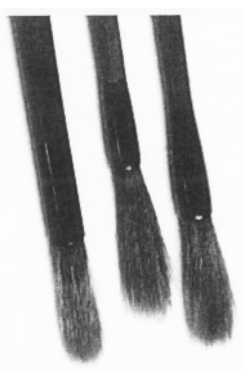
ここでは、縦形式・横形式・正方形の紙面で草稿を書いていきます。まず、漢字の位置が重要なポイント。縦形式と横形式の場合、漢字がそれなりに散らばってくれたので「よし」としました。一方、正方形の形式では、漢字がどうしても下部に来て全体が重くなるのが分かり、この形式はボツにしました。

また、漢字を引き立たせるためには、前後左右にくる文字をどう書くかも検討します。潤濁や墨継ぎの位置もだいたい見当をつけておきましょう。



花いばらここの土とならうよ

これも二行目をどうするかが作品の出来を左右しそうだ。濁筆部の「ここの」を徐々に盛り上げるように書き「土と」の潤筆とのコントラストを意識するとおもしろいと思う。



▲作例制作に使用した筆

右：和筆「慶雲」慶花堂 細微光筆

筆先：約4・5センチ（羊毛）

20年程使い込んだもの

中：和筆「鳳友」文志堂

筆先：約5センチ（羊毛）

左：唐筆「玉蘭蕊」

筆先：約4センチ（羊毛）